Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Thomas R.Cole, "The Journey of Life : A Cultural History of Aging in America", Cambridge University Press, 1992
Author(s)	水嶋, 陽子
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 184-188
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12213
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

◇書　評◇

Thomas R. Cole

The Journey of Life: A Cultural History of Aging in America

Cambridge University Press, 1992

水嶋　陽子

平均寿命が延び、二十一世紀には未曽有の高齢化社会へと日本は突入するといわれて久しい。長生きする人が稀であった時代、長寿は憧れであった。だが実際に多くの人にとり長寿が可能となった今日、自らがほぼ確実に迎えるであろう老後に対して、人はそれを手放しには喜んでいない。かえって、「痴呆」や「寝たきり」など老いにともなう否定的なイメージへの強迫観念にとらわれているという皮肉な結果がある。

現代人の意識をつよくとらえている「老い」は、時代と民族、性と階級をこえた万人のものである。しかしアリエスが子供や死という概念が時代により異なることを明らかにしたように、老いに関する認識もまた社会と時代の価値体系によって規定されている。

ゆえに本書の主題は、その副題が示すようにアメリカにおける老いの社会史であり、負のイメージが先行する現代の老いが歴史的につくられてゆくプロセスを明らかにすることを目的としている。主に扱う時代は、ピューリタンが新大陸にやってきた十七世紀前半から、第一次世界大戦のおわる二十世紀初頭である。この期間における人口構成、労働形態、文学、絵画、出版物、宗教家や生物学者、医者などの発言と研究成果、そして若返りのための薬といったヒット商品などが綿密に拾いあげられる。

主に対象となる三百年間を著者は三分割するが、その境界線は、老いの意味付けにおいて支配的役割をはたした要素の変遷に対応している。意味の源泉となる要素には、宗教的なもの、世俗の進歩に貢献するかという社会的もの、医学など科学的なものの三点がある。

本書を紹介するにあたり、丹念に調べあげられた具体的事例に言及することは困難なので、以下、本書の三区分にしたがって各時代ごとの「老い」が成立するプロセスに焦点を定めて要約し、その後にコメントを加えたい。

1　宗教的な老いの把握

アメリカへわたったピューリタンは、キリスト教的な「成熟」という理想をもっていた。それはより神に近い存在になるために、継続的に成長しつづけるという姿勢である。その典型は、バニヤンの『天路歴程』にみられる。そこには、さまざまな艱難を精神力で乗り越えて成長する庶民が描かれている。このキリスト教的な、人は成長しつづけるとみなす傾向と、家父長制の伝統が、老いを尊敬の対象とした。老人は神に向かって完成のために成長しつづけている存在であり、老いることは宗教的、社会的に豊かであることを意味するからである。

老いへの思想的な尊敬を実質的にささえていたのは、老いた親がもつ土地の権威であった。だが十八世紀から十九世紀はじめには、親の世代が子供の世代に対してコントロールする力が弱くなり、それにともない老年の価値も低下する。第一に、ロックの『教育論』が流行し、子供を家父長的な権威に従わせるのではなく、自由で独立した市民として教育しようとする気運が高まったため。第二に、子供が労働者として都市へ吸収され、親の仕事を継がない傾向が強まり、財産としての土地の価値が低下したためである。

だが同時にこの時代は、老いるまで生きる人が稀であったという点を著者は重視する。そしてこの点をうまく利用したカルヴァン派の牧師たちの「死の無秩序性」(death without order) の考え方が、こうした状況下で老いの尊厳を支えた、とみる。この考えは、生命は神から与えられた神秘な贈り物であり、個人の死のタイミングと死にざまはあらかじめ決められているのであるから、若者も老人より死から遠い位置にいるのではないというものである（同じことを日本の古い宗教では、「老少不定」という）。この考えに基づき、老人は神からすばらしい特別な慈悲を受けた人とみなされ、尊敬の対象とされた。

2　「啓蒙された」道徳による老いの把握

十九世紀前半、アメリカ社会は自由主義経済の急激な発達にともない、大変化をとげる。ピューリタン的な家父長制に基づく社会は解体した。そして親の住む田舎の農園から都市にでてきて労働者となったものが、アメリカを代表するミドルクラスをつくった時代である。この時代、新たにミドルクラスの一般道徳となったものを、著者は「啓蒙された」道徳（“civilized” morality）とよぶ。「啓蒙された」道徳とは、独立、健康、成功をよしとするもので、その達成のためには、自分自身の身体と肉体的エネルギーをコントロールすることが求められる。そのもとで、従来は神のものと考えられていた生命は、個人の財産とみなされるようになる。

ここから「啓蒙された」道徳は、一方でエイジズム（高齢者層差

別）の起源となり、また一方で人々に健康志向をうえつけた。まずエイジズムの発生プロセスを具体的に追うことで、この時代に、老いが、いかにして尊敬の対象から否定的なものへと変化したのかを明らかにする。

十九世紀における産業化の進展が、成長すれば親元を離れて労働者となる子供への教育の必要性をうんだ。その子育てのためにもちいられたのは、ピューリタンの伝統的な「道徳的によく教育された個人」を重視する見方だった。そのため、道徳的であること、すなわち信心深くあること、宗教的に完成することの内容が、この時代には社会的労働力として有益な人間になることにすり変わる。当時すでに公的制度としては崩壊したキリスト教は、教育熱の高まりを受けて、その存在意義を子供の教育に見出し、この流れにそった聖書解釈を行なう。その結果、すでに出来上がっている老人よりも、教育により社会的に有用な性格を身につけることの可能な子供に高い宗教的価値がおかれる。こうした動きは、イデオロギーや心理的な面での老齢者の権威の弱体化をすすめた。

ここからさらに一歩進んで、「啓蒙された」道徳により新たにつくられた、生命は個人の財産という視点は、老年の質は自己訓練によって決まるとする考えを生む。年老いて働くには不自由になった体は、その人の罪深さのシンボルとなり、失敗とみなされる。老人はすべてその体内に罪の証明をもっている存在となり、これがエイジズムの起源となる。

この時代のもうひとつの特徴として、ヘルスリフォーム運動と老いに関するセルフヘルプマニュアルに著者は言及する。それらは、個人の罪とされた老いの成立と表裏一体をなす、良いものとみなされた老いを志向することのあらわれといえるだろう。では次に、ヘルスリフォーム運動等の盛んになる背景にある、人々に望まれた老いとはどのようなものであったのかをのべる。

この時代は、労働に適したものとしての身体の健康に特別の価値がおかれた時代であり、長寿それ自体は信心深さときちんとした生活の証明というプラスの価値を含んでいた。上述のように、老いて身体の弱体化することが個人の道徳的な失敗とされた時代は、同時に、各個人の道徳的訓練により獲得できる「健康」の作られた時代でもあった。健康な老年は神聖なものとみなされ、個人の生活のゴールとして人々の意識のうちにあらわれる。

ここから、人間は本来健康であるとの前提にたち、自分の所有物である健康を出来るかぎり長く温存しようとする動きが生ずる。さらに死にもおよんだ健康の概念は、エイジズムで嫌われる死とは別に、苦しむことなく迎える「自然死」という考えをうんだ。この「健康な死」としての自然死に至るべく、簡素で規則的な生活をして健康を保つことが、望ましい老年期の過ごし方となる。その方法を説くことで、健康と長寿を追求する人々の需要を満たしたのが、この時代に盛んになったヘルスリフォーム運動と老いに関するセルフヘルプマニュアルの出版だったといえる。

3　科学的な老いの把握

十九世紀後半の時代になると、老いは生物学の視点でとらえられるようになる。一定の年齢以上になると、仕事の生産性、効率が限界に達することを統計的に証明して、ゆえに老人は引退すべきだと主張する医者たちがジャーナリズムをにぎわせた。また他方では、不老不死の生命を求めて、細胞の研究をする者があらわれたり、老いに対して若返りと延命のために医学的、衛生学的な方向からの努力がなされるなどの動きもあった。とくにこれらのうち、医者たちが老いを労働効率との関連で下した評価は、社会全体での老年期の評価として受け入れられる。そして二十世紀には、老いは完全に科学的、技術的な検査の対象として扱われることとなる。

その結果として第一に、ライフコースを社会の側から標準化し、制度化することを可能にする下地ができた。なぜなら老いが科学的、技術的なものになることは、老いが、健全な生活をするなど個人の努力で対応できるものではなくなり、個人の手を離れることであったからだ。

第二に、老人病学が成立して、「老衰」(senile) というライフステージがつくられた。そもそも通常の老いと病理的な老いを明確に区別する基準を、医学はもっていなかった。そこで自らの対象として還元のできる老いにたいして名付けたもの、それが「老衰」であった。しかし、老年期と死の間に生涯最後の段階として老衰期がおかれることは、老いの必然として病をともない医者に助けられつつ死を待つ時期をつくることになる。実際に老年や老人の理解において、医学の発言権は絶大なものとなった。そしてのちに老衰の概念は、年齢を基軸にした引退制度や老人ホーム、病院など老人を扱う機関の正当化を促すことになる。

第三に、老人病学と同じく、老いを科学的にとらえることを試みる老年学が成立した。老年学は、老年期の問題を、心理的、シンボリックなものとみる。その上で、今後の心理学、生物学、老人病学の発達により、老年期における自己の再建に役立つ基盤が与えられれば、否定的な老年期の乗り越えが可能だと考える。老年学は、そうした生き方を可能にするためには科学者や専門職としての介護者が必要である、との結論に至る。

以上、老いの科学的把握がもたらす三つの結果は、二十世紀後半の今日、老年は問題であり、プロによる特別な介助が必要であるという認識にもとづき、今日のシルバー産業 (aged industry) を生みだす。介護を必要とする時期として制度的に作り出されたライフステージ、それが現代のアメリカにおける「老い」である、と著者は結論づける。

4　本書の評価

まず最初に、ここまで粗描してきた内容と離れ、本書のタイトルをめぐってのコメントをしたい。なぜなら、本書を貫く著者の信念はタイトル (The Journey of Life) に集約されており、このタイトルと内容との不一致は本書の特徴のひとつと思われるからである。

著者は、タイトルにあるように人生はイコール遍歴 (journey)

という精神的ドラマだとの視点をもつ。ライフコースの概念は近代初期のヨーロッパでつくられるが、そのイメージの原型は、楽園を追放されたアダムとイブが神の救いを探し求めて遍歴する姿にあった。ゆえに、老いることを含め生きることは、一種の遍歴であると考えるのである。

「旅」を意味する英単語はいくつかあるが、それらのうちジャーニーは唯一、特定の目的をもたず、旅することそれ自体が目的である旅である。とくにこの言葉で生涯をたとえるのは、著者が生きることそれ自体に意味と価値を見いだそうとするからであろう。

たしかに科学は、老いにともなう身体の弱化を人間に普遍のものとする。しかしこれを理由に、「老年期の弱さを受け入れ、助け合う人間関係を構築することで精神的に成長することが、今後の、老いて生きる意味である」とするのは、あまりに身勝手だろう。なぜなら、その同じ科学によって老年は病のときとなった面もある。またたとえエイジズムを非難しても、我々は、老いを否定的にとらえる根拠となる産業主義的な価値観の拒否をしてはいない。こうした現状をふまえると、タイトルにあらわれた著者の信念は希望的観測の域をでないうちに、本書はおわっている。

次に本書の内容に関してであるが、価値観が宗教的→産業主義的→科学的にと変化するのにともない、老いは尊敬の対象→罪悪の証(あかし)→嫌悪の対象にと変わったとの視点自体は平凡なものである。しかしこの本の価値を高めるのは、老いの社会史としてまとまった本は意外なことにほぼ皆無に等しいという事実であろう。

今後のエイジング研究において、健康、病気、高齢者差別など老いをめぐる現象の歴史的、文化的理解の重要性が高まることが予想される。なぜなら、社会学なり社会科学において、老いは病と混合されてとらえられてきたのだが、大衆長寿社会の今日、必ずしも病気ではなく元気な高齢者がふえている。そのため、従来の枠組みと現実の「老い」にギャップがではじめているのである。こうした状況下で、今日の老いとは別に、多様な老いの形があることを史料に基づいて明らかにした点は評価されるべきであろう。

本書は、精神遍歴モデルに基づく新たな老いの形を追求する著者にとっては未完のものである。しかし、現代の老いに初めて歴史的視点より本格的にアプローチしたものとして、その先駆性は注目に値する。また加えるならば、当時のアメリカの生活がいきいきと描かれている本書は、歴史物語としても楽しいものと思われるので、そうした意味からも一読を勧めたい。

なお著者T・C・コールは、一九四〇年生まれの歴史学者で、現在はテキサス大学医学部付属の研究機関でエイジングに関する歴史と哲学のゼミをもつ。老年研究に、人文学的立場より新しい視点を導入しようとする一派の中心人物のひとりとみなされている人である。今年一九九三年には、「批判的老年学に向けて」というタイトルからも、本書の続編と思われるものを編集している。そこにおいて、未完におわった本書を引き継ぎ、現代の老いへのアプローチがなされていることを期待しつつ、この書評を終わりにする。